

ORANGE
Vol.30

朝倉美津子《躍動》 2018(平成30)年 田辺市立美術館蔵

《躍動》について

「このたびは めさも取りあへず 手向山 もみぢの錦 神のまにまに」

作品《躍動》は、菅原道真にも歌われた幣(めさ)に着想を得ています。神様に捧げる幣をイメージして、動と張力のバランスの上に造形しました。

絹糸を様々なバリエーションに染め、織上げてから表と裏に反転させて連続の中に不連続性と意外性を表しています。

糸が交わる織の美を追求する私の「ORITATAMU 織/折りたたむ」シリーズの一作です。

糸を全身全霊で染めてから巻き上げ、手織機に掛けて経糸とします。この経糸に緯糸を一越ひとと越と織りなしていきます。

機に向かって制作する時はいつも、厳粛な気持ちになります。

一昨年に田辺市立美術館から展覧会開催依頼のお手紙を頂戴した私は、何れともあれ現地訪問をしました。良い所だなあと喜び思い、熊野古道へと、近露王子から継桜王子を目指して勇んで歩き出しました。お天気も良く自然溢れる山道を元気一杯歩きましたが勇ましかったのも束の間、30分も行くと息が切れました。ふと脇道の方を見ると石段の先に朽ちた古寺があり、少し休んでいこうと思い上って行った所、梅の木苔がびっしりと付いた雑木が沢山積み重なっていました。梅の木苔は古木に生える苔で、綺麗な赤紫色に染めることができます。私は30余年前に一頻り取り組みましたが、まとまった量はなかなか手に入らず断念した染料です。「もうこんな機会は二度とない」と小躍りして無我夢中で沢山採取しました。おかげで疲れも吹き飛びましたが、時間が無くなり目的地まで半分も行かずに引き返しました。帰宅後早速この梅の木苔で絹糸を染め、本作に織り込みました。

(朝倉 美津子)

※今回特別に作者の朝倉美津子氏より自作についてのご寄稿をいただきました。

REPORT 熊野古道なかへち美術館開館20周年記念特別展『鈴木昭男 ― 内 在 ― 』

昨年の10月から11月にかけて熊野古道なかへち美術館の開館20周年を記念した展覧会を開催しました。日本のサウンド・アートの先駆者である鈴木昭男(1941―)による、この展覧会のための新作インスタレーションを披露するもので、「音の内在」についての長年の思索と熊野古道なかへち美術館をめぐる環境から着想された、《内在》、《響》、《句》、《階段》の四つの作品を美術館の内外に設置しました。

鈴木は「聴く」という行為を、独自の思考と方法とで創造的な行為へと導く「場づくり」の手法を一貫し、作品に接する人々をそれまで意識していなかった音を意識することへ、さらには実際には聴こえない音を想像することにまで誘ってきました。この展覧会も、鈴木の作品が示す様々な要素を手掛かりに、答えのないそれぞれの「音」について思考を巡らせていただく趣向となっていました。

展示に加えて、展覧会の初日と最終日に鈴木によるパフォーマンスも開催しました。オープニングの「パフォーマンス」なげかけ」では、鉄角パイプと石による

メインとなった
インスタレーション
《 内 在 》



田辺市立美術館へのきもち②0

私の勤務する浜松市秋野不矩美術館は、静岡県西部・浜松市の山間、天竜区二俣の地に建ち、この地の出身で日本画団体「創造美術(現・創画会)」を創立した画家の一人である秋野不矩(1908-2001)の画業を紹介する顕彰美術館として活動を行っています。昨年開館20周年を迎え、節目の年を飾る特別展として、田辺市立美術館との共同で画家の生誕110年記念展「秋野不矩―あふれる生命(いのち)の輝き」を開催しました。田辺市は創画会会員の稗田一穂の出身地でもあり、同館ではこれまで「創造美術」を結成して活躍した画家の芸術を回顧する展覧会を継続して開催されていまして、画家生誕の節目でもある2018年度に共同開催を実現させようと、3年前から相談しあって企画立案を進めました。お陰をもちまして秋野不矩の創作活動の成果をお伝えすることのできる充実した内容となり、大変多くの皆様に本展覧会をご覧いただくことができて安堵しています。

私が秋野不矩美術館で学芸職を拝命したのはわずか5年前のことで、当時学芸員は1名のみの配属でしたため、異動当初は前任者が準備を進めていた展覧会を右も左も分らぬまま丸々引き継ぐような状況でした。その頃当館では前述の稗田一穂と、同じく創画会会員の毛利武彦との二人展の開幕準備が佳境に差し掛かっており、着任すぐに出品作品の借用に向うかなければならず、また私事ながら第1子の誕生を間近に控えていて、言い知れぬ緊張感の下で辞令を受けたことを記憶しています。配属されて約1週間後、学芸員としての最初の借用訪問先が田辺市立美術館でした。出発日の前日に妻が産気付いたため、一晩病院に付き添い、その足で出張に赴きましたが、田辺市立美術館では私の初の対外業務を学芸員の三谷さんに温かい目で見守っていただき、不慣れではありましたが無事務めを果たすことができました。実は、館訪問の直前に第1子誕生の報告を得ていましたので、学芸員として、親として、同じタイミングでスタートラインに立ったことになります。このような自分自身の節目の時に田辺市立美術館との関わりができたことは、不思議なご縁とともに特別なことに感じています。

個人的な関わりを主に書かせていただきましたが、もとより両館は研究テーマにおいて近い志向を持っていたり、ともに全国美術館会議の小規模館研究部会に所属し、似通った課題を抱えていたり、共通する部分が多くあります。今回、両館の協力によって秋野不矩展の成功を見ることができたように、この先も両館で力を合わせていける可能性がまだまだあるように思われます。私自身の一層の精進と成長をお約束しながら、未永いお付き合いを賜りたくお願いいたします。

(浜松市秋野不矩美術館学芸員 鈴木 満広)

田辺市立美術館での「秋野不矩展」
記念講演会にて

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.30

編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館

発行年月日：平成31年4月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たなきい町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

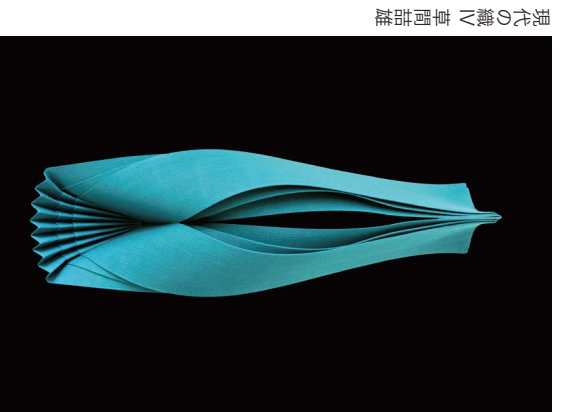
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/



田辺市立美術館(田辺市)の「写真から、写真へ」展 田辺市立美術館蔵

1. 小企画展 戦後の表現
戦後に展開した新しい美術表現を、児童品を軸に紹介し、「版面」・織の造形、「絵画に彫刻」の三つの章で、多彩な作品を展示します。
2. 世界遺産登録15周年記念展 描かれた魂
「紀伊山地の霊場と参詣道」のユネスコ世界遺産登録15周年を記念して、熊野のシンボルともなっている「魂」の表現をテーマにした展示を行います。田辺市立美術館では、文人画と南面の表現に注目して開催します。
3. 館蔵展 文人画コレクション
当館が収蔵する文人画作品から、「貴景図」やさまざまな像を写す風景の表現を紹介いたします。
4. 小企画展 廣勝四郎と紀南の画家たち
フランスを放浪して帰国した後、当地を離れることなく制作を重ねた廣勝四郎(1866-1964)の作品を、交流した紀南の画家たちの作品とともに展覧します。
5. 特別展 岸田劉生展 ― 写真から、写真へ ―
大正から昭和にかけての時期に強烈な個性を発揮し、西洋的な「写真」の要素から、独特の東洋的な「写真」へと精緻に仕上がった岸田劉生(1891-1929)の表現の軌跡を、空間自動美術館のコレクションを軸にして振り返ります。

1. 特別展 現代の織Ⅳ 章間結維
現代の織られた織の造形を紹介する展覧会シリーズの4回目。1970年代初めからアメリカに渡って行体的な織の造形に取り組み、現在まで国際的に活躍している章間結維(1946-)の制作を、最新作を主にして展覧します。
2. 世界遺産登録15周年記念展 描かれた魂
「紀伊山地の霊場と参詣道」のユネスコ世界遺産登録15周年を記念して、熊野のシンボルともなっている「魂」の表現をテーマにした展示を行います。熊野古道なかへち美術館では、日本面の表現に焦点をあて開催します。
3. 特集展示 清高の画家 日高昌克
和歌山県御坊市出身で、本職の医業をやめてまで絵を描くことを生業とにした異色の画家、日高昌克(1881-1961)の作品を紹介いたします。
4. 特集展示 没後50年 鍋井克之
没後50年となる近代の洋画家、鍋井克之(1908-1969)の表現を、好んで描いた紀南の風景を主題にした作品を中心に振り返ります。



現代の織Ⅳ 章間結維

滝の表現

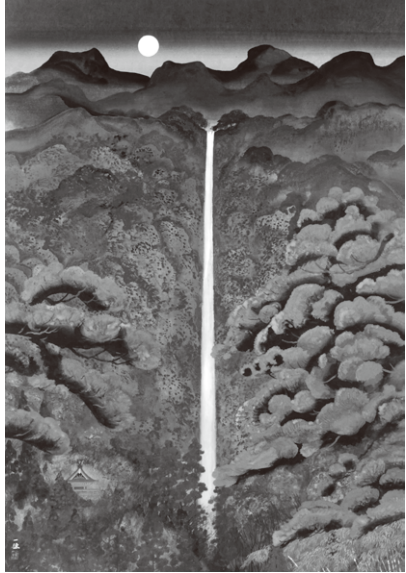
2004年7月7日に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されてから、今年で15周年を迎えます。紀伊山地は、その雄大な自然に神々が棲み、顕れる霊験あらたかな場所と古から考えられ、様々な信仰の対象となってきました。当地、紀伊山地の南部、熊野地方では「滝」がその霊域のシンボルの一つとなってきました。滝の中でも特に、133メートルの日本一の落差を誇る「那智の大滝」は、その荘厳さと信仰の歴史に多くの画家たちも魅了され、作品としてきています。

江戸時代中期に中国からもたらされ、日本で独自の発展をみた文人画においては、胸中を託す山水の表現が主となり、その中で滝は、聖性や高邁な精神を象徴するものとして描かれてきました。「那智の大滝」については、画家が風景から受けた実感に基づいて表現する、「真景図」の対象としても好まれ、多くの文人たちが遠くからも訪問して描いています。

明治期以降、文人画が衰退してからも、その精神を引き継ぎながら新しい水墨表現を開拓した南画家たちによって、こうした滝の表現は継承されました。



野呂介石 《熊野三瀑之図》
1812(文化9)年 田辺市立美術館蔵



裨田一徳 《神瀑・那智》
1994(平成6)年 田辺市立美術館蔵

新収蔵作品について

昨年度は、5点の作品を購入した他、25点の作品のご寄贈をいただいて、30点の作品を新たに収蔵することができました。

購入した作品は、南画家、渡瀬凌雲(1904－1980)の第15回帝国美術院展出品作《那智瀑》(1934年／240.5×120.3cm／軸装 ※右の図版)、洋画家、原勝四郎(1886－1964)がフランスで描いた《風景》(1921年／18.8×25.7cm／額装)、写真家、鈴木理策(1963－)の近年の代表的なシリーズ「水鏡」の2点《15.WM-270》、《15.WM-272》(ともに2015年／120.0×155.0cm／額装)、織作家、朝倉美津子(1950－)の初期の秀作《エスカレーション》(1973年／228×147cm／タピスリー)です。

渡瀬と原の作品は、ともに数少ない官展の入選作と滞欧作で、画業を振り返るときに欠くことのできない貴重なものです。鈴木作品は3年前に、朝倉の作品は昨年に開催したそれぞれの特別展に出品したもので、両作家の特に充実した作品として購入しました。

寄贈を受けた作品は、原勝四郎がフランスから帰国して間もなくに描いた《草上》(1921年／37.8×45.5cm／額装)、同じく原が最晩年まで精力的に描き続けた、バラをモチーフとする静物画の初期の優品《バラ》(1933年頃／33.3×23.9cm／額装)など原の作品5点、鈴木理策の熊野をテーマとした「海と山のあいだ」のシリーズから《14.DK-262》(2014年／119.0×95.2cm／額装)他15点、朝倉美津子の制作を代表する「ORITATAMU」シリーズの《経過音》(2000年／190×180cm／タピスリー)と、最新の作品《躍動》(2018年／72×100cm／タピスリー ※今号の表紙に図版と作者からのご寄稿を掲載しています)など5点です。原の作品はご所蔵家2名の方から、鈴木、朝倉の作品は作家ご本人からのご惠贈でした。

渡瀬凌雲、原勝四郎は、当館が長らく調査、研究を重ねてきた画家で、今回の新たな作品収蔵もその成果の延長にあります。また、鈴木理策、朝倉美津子については、近年の展覧会活動が作品の収蔵に結びついたものです。調査と研究、展覧会といった美術館の根幹をなす活動が、コレクションの拡充につながっていることをとても嬉しく感じています。この良いサイクルを今後も維持してゆきたいと思います。

当館の活動にご理解をいただき、貴重な作品をご惠贈いただきました方々に改めて衷心よりの感謝を表します。

近代以降の日本画、特に戦後においては、滝もまた新たな造形表現の対象として斬新な描かれ方をするようになりますが、そこでも従来の「滝」が有してきた象徴的な意味合いは完全に切り離されることなく、連綿と表現の中に息づいています。

この夏、田辺市立美術館の本館・分館を会場にして、「那智の大滝」を中心に、「滝」の表現が日本近世以降の絵画においてどのように変遷してきたかの一側面を振り返る展覧会を開催します。会期中には、小松正史さん(昨年3月に開催した連続講座「森と芸術」に講師としてお越しいただいた作曲家、京都精華大学教授)による、『熊野古道組曲』をメインにした世界遺産登録15周年記念コンサートも計画しています。

芸術を通して、改めて当地の歴史と自然の魅力に触れていただく機会になりましたら幸いです。

(学芸員 知野 季里穂)

INFORMATION

世界遺産登録15周年記念展 描かれた滝

会 場／田辺市立美術館
観 覧 料／400円(320円) 学生及び18歳未満の方は無料
※()内は20名様以上の団体割引料金です。

会 場／熊野古道なかへち美術館
観 覧 料／300円(240円) 学生及び18歳未満の方は無料
※()内は20名様以上の団体割引料金です。

会 期／2019年7月6日(土)～9月23日(月・祝)
※田辺市立美術館では、一部展示替えを行います。
前期:7月6日(土)～8月18日(日)
後期:8月20日(月)～9月23日(月・祝)
開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日／毎週月曜日(ただし7月15日・8月12日・9月16日は開館)
7月16日(火)・8月13日(火)・9月17日(火)

世界遺産登録15周年記念コンサート

ピアノ:小松正史(作曲家・京都精華大学教授)
8月3日(土) 午後7時開演
田辺市立美術館エントランスホール
定員80名・先着順
※7月13日(土)午前10時から
電話(田辺市立美術館:0739-24-3770)にて
予約の受付を開始します。

REPORT 佐伯祐三と近代の洋画

昨年は、自分の命を作品に刻みつけるかのように疾走して、30歳の若さでパリに客死した洋画家、佐伯祐三(1898－1928)の生誕120年と没後90年を迎える年でした。この機会にその芸術を改めて見つめなおし、同じ時代を生きた洋画家たちの表現とともに振り返ることを意図した小企画展、「佐伯祐三と近代の洋画」を昨年の12月から今年の1月にかけて開催しました。

開催には、大阪中之島美術館、和歌山県立近代美術館の格別なご協力をいただき、それぞれの美術館が所蔵する、佐伯の美術学校在学中から最晩年までの代表的な作品をお借りして、それらを一堂に展観しました。おかげで展覧会はいへんな盛況となり、多くのご好評の声をいただくことができました。

今回展示した、大阪中之島美術館、和歌山県立近代美術館、そして当館の所蔵する佐伯の秀作は、どれも元々は、情熱と優れた審美眼とを有するコレクターたちが収集していたものです。いずれもその後、当人から、または没後にご遺族から、美術館に寄贈されました。コレクターたちの功績や、佐伯の作品に寄せた思いと収集の経緯をお伝えすることを考えて、会期中に記念講演会を行いました(講師は筆者)。山本発次郎(大阪中之島美術館)、玉井一郎(和歌山県立近代美術館)、脇村義太郎(田辺市立美術館)のコレクションを紹介するとともに、そこからうかがえる佐伯の作品の魅力についても触れることに努めました。

講演会の翌日には、これまでの佐伯の展覧会に関わってこられた3人のゲストをお招きし、その作品の魅力について掘り下げた内容で話し合う、記念シンポジウムを開催しました。生誕100年の記念展に携わられた大阪大学の橋爪節也さん、和歌山県立近代美術館勤務時にフランスに渡って調査を行い、展覧会を開催された広島市現代美術館の寺口淳治さん、国内での制作に焦点をあてた展覧会を企画された新宿歴史博物館の守谷賢一さん、各々の視点から、佐伯の作品と生涯の軌跡を分析し、考えてこられたことを語ってくれました。聴講の方々との意見交換や質疑応答も交えて二時間あまり、とても密度の濃い内容でした。

この他に会期中に二回の展示解説会も行いましたが、どの催しにも熱心な大勢の方々に参加してくださり、今もなお佐伯祐三とその時代の洋画家たちの遺した作品の輝きが鈍ることなく、それに接する人たちを魅了し続けていることが実感されました。

(学芸員 三谷 渉)

21年目を迎えた熊野古道なかへち美術館



妹島和世さん、西沢立衛さんから開館20周年を祝したメッセージとともに贈られたラビットチェア

熊野古道なかへち美術館は、昨年開館から20周年を迎えました。1998(平成10)年に旧中辺路町立の美術館としてオープンし、2005(平成17)年の市町村合併以降は、田辺市立美術館の分館として活動を積み重ねてきています。

「熊野古道」が冠になっているように、当館の何よりの特徴は、立地している環境の歴史的、文化的な深みにあるといえます。またその景観と調和しながら、周囲に新しい息吹を感じさせているガラス張りのモダンな建築は、当館のあり方をそのままよく伝えてくれています。この設計にあたった建築家のユニット、妹島和世+西沢立衛/SANAAが、その後世界各地の美術館建築に携わって国際的に活躍していることは、ご周知のことと思います。

昨年度、開館20周年を機会としたいいくつかの事業を実施しました。一つは記念特別展の開催です。日本を代表するサウンド・アーティストの鈴木昭男さんに新作をお願いし、美術館とその周辺の環境に改めて意識を向け



記念講演会「佐伯祐三作品のコレクターたち」



記念シンポジウム「佐伯祐三作品の魅力」

いただくことを意図した内容でした(今号にREPORTを掲載しています)。

もう一つの大きな事業が、上記の特別展終了後に5ヶ月間の休館をいだいて行った、改修工事です。主に展示室に関するもので、空調機を更新し、天井を張替えて、照明用の配線ダクトやピックアップレール、監視カメラなどを新設しました。これによって、作品の保全と展示の両面から展示室の機能を一段と高めることができました(下の写真)。

昨年の開館記念日にあたる10月10日、妹島和世さんと西沢立衛さんから、お祝いのメッセージとともに、オリジナルデザインのラビットチェアが贈られてきました(左の写真)。思いがけないご好意で開館20周年に花を添えていただきました。こうした当館に寄せていただいているお気持ちを大切にしながら、4月からの21年目のスタートを心新たに切りたいと思います。「現代の織Ⅳ 草間詰雄」展から始まるリニューアル後の活動に、引き続きご注目ください。皆様のご来館をお待ちいたします。

(学芸員 三谷 渉)



新しい照明での展示にご期待ください

2019年度

2019年度

田辺市立美術館

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

展示替のため休館

①小企画展
戦後の表現

4/20(土)～6/23(日)

展示替のため休館

②世界遺産登録15周年記念展
描かれた滝

7/6(土)～9/23(月・祝)

展示替のため休館

③館蔵品展
文人画コレクション

10/12(土)～11/24(日)

展示替のため休館

④小企画展
原勝四郎と
紀南の画家たち

12/7(土)～
2020.1/19(日)

展示替のため休館

⑤特別展
岸田劉生展
一写美から、写意へー

2/1(土)～3/22(日)

熊野古道なかへち美術館

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

展示替のため休館

①特別展
現代の織Ⅳ
草間詰雄

4/20(土)～6/23(日)

展示替のため休館

②世界遺産登録15周年記念展
描かれた滝

7/6(土)～9/23(月・祝)

展示替のため休館

③特集展示
清高の画家
日高昌克

10/12(土)～11/24(日)

展示替のため休館

④特集展示
没後50年
鍋井克之

12/7(土)～
2020.1/19(日)

展示替のため休館

展示替のため休館

■ワークショップと発表
ワークショップ：2/29(土)
展示期間：3/1(日)～3/8(日)

熊野古道なかへち美術館

展示替のため休館

展示替のため休館

展示替のため休館

展示替のため休館

展示替のため休館

展示替のため休館

展示替のため休館

■ワークショップと発表
ワークショップ:2/28(土)
展 示 期 間 :3/1(日)～3/8(日)